

「学校づくり」分科会 感動の行事を軸として

長岡 節

はじめに

10年前、私が着任した当時の本校は、その当時のほとんどの中学校がそうであったように、学校荒廃の嵐が吹きあれていきました。他校の話を聞くと、まだましかな、と思えるにしても、前任校で平和な毎日を過ごしていた私にとっては、大変な試練でした。とにかく何もかもが今までとはちがい、それまで積み上げてきた指導法や自信など、全くどこかへ吹き飛んでしまい、まるで新卒のような不安と心細さの毎日でした。

しかし、その中でも冷静に学校のあり方を見てみると、前任校とは色々な部分で異なっている所が徐々に見えてきました。まず一番に感じたのは、学校行事の中で、生徒も教師もが、共に感動する場面がないという事でした。一応、いくつかの行事はあるものの、ほとんどがおざなりで、積極的な意義を見出さないで行われている事が、大変気になりました。文化祭もなく、学芸会が3年に1度という状態で、文化的な香りのするものは、ほとんど感じられませんでした。その年は、ちょうど展覧会なるものの年に当たっていましたが、毎日の授業の積み重ねや、それに向けて取り組んだものの発表というものは少なく、多くは生徒や教員のもつているコレクションの展示という、およそ想像もできなかったものでした。そして、決定的にショックを受けたのは、三月に行われた「3年生を送る会」と称されたものでした。

一応在校生が歌を歌ったり、劇をしたりするのですが、3年生は見てもいないし、聴いてもいません。ただ体育館の中で、勝手に話し、騒いでいるだけなのです。一体これが、送られる人の態度なのだろうか、と唖然としたことを覚えています。唯一静かになったのは、その年に初めてできた吹奏楽部が、音量にモノを言わせて演奏した時だけという、悲惨なものでした。前任校で、生徒たちの魂をゆさぶられるような合唱や、様々な行事に真剣に取り組む姿を見て、涙を溢れさせられたことを思うと、ここの子どもたちにも、何とか、その思いを味あわせてやりたい、このままではいけない、と強く思わされました。

対面式への取り組み

最初の年の対面式は校庭に1年生と上級生が向き合い、朝礼台の上で上級生代表と1年生代表が言葉を述べ、生徒会役員を紹介するだけという簡単なものでしたが、吹奏楽部もでき、生徒も徐々にではあるけれど、全校で歌える状態になりつつだったので、翌年から体育館で、吹奏楽の演奏や、歓迎の合唱で新入生を迎える、また上級生たちの手づくりによる、一人ひとりへの歓迎のメッセージカードを贈ったりして、対面式を、より印象的

なものにしていきました。入学式に続く上級生たちの、小学校とは全く異なる迫力ある合唱に、新入生たちは圧倒され、中学校ってすごいところだなあ、という印象を持つようです。それに引き続くオリエンテーションでも、役員たちが劇をしたり工夫をこらして1年生に中学生としての心がまえを教え、すぐに交流が深まっていくようです。

涙なみだの離任式

私が離任式を何とかしたいと思ったのは、荒れていたこの学校で厳しく、暖かく生徒に接して、荒廃の拡大を阻止していた、ある体育の先生の離任の時でした。あれだけ学校のためにがんばった彼に朝礼のついでのような形で、単にあいさつさせ、花束を渡すだけで、終わってしまったのを見て、せめて最後ぐらい、何か彼にもっと報いてあげたかった、という気持ちでいっぱいになりました。

そこで、次から体育館で離任式の時間を確保し、全員で椅子にすわり、卒業式と同じ形で、拍手で離任した先生方を迎える、それぞれなじみの深かった生徒に別れのあいさつをさせ、花束を渡し、全校で感謝と別れの気持ちを込めて合唱し、拍手で送り出すという形にしました。初めて、この形で離任式を行った時は、今まで学校行事の中では、涙を流すことのなかった生徒たちの多くが涙を流し、職員たちも胸がいっぱい泣いてしまうという感動あふれるものになりました。本来は学校行事なのかもしれません、生徒会行事として、司会進行すべて生徒たちの手によって行われることも、いっそう生徒の感情を高める原因になっているのではないかと思われます。

全校で行うフォークダンス（文化祭への取り組み）

初めに触れたように、文化的行事がほとんどない中で、まず初めは「文化発表会」という名目で、授業での成果の発表を中心に、一応、毎年発表の場はもつことになりました。そして、それに加えて、クラスでの参加という形をとり、更に、2年前から学年としての参加というように変わってきていますが、貫して変わらないのが、全生徒の参加による全校フォークダンスです。

初めの年は総務（生徒会役員）から全校で取り組みたいという要望があったのですが、職員側の多くの「できる訳がない」「大変だ」という意見が多く、任意参加で、ということで始まりました。実行委員と総務を中心に、文化祭の何週間も前から、昼休みや放課後に中庭で、小さな輪を作り、まわりで見ている生徒たちに声をかけ、呼び込んでステップを教えたりしながら、練習が行われました。そして当日。どれ位参加してくれるかな、という心配をよそに、実行委員たちの呼びかけに、最初は小さかった輪が、だんだん大きくなり、最後は全校の1／3程の生徒が参加する大きな輪になりました。終わった後の実行委員たちは、涙なみだです。この成功を見た教師側も、次の年からは全校で行うというこ

以後、毎年、文化祭のメイン・イベントとして定着しています。ここ何年かは、
うん、主事さんや、見学の親たちも加わり、全校が一つになって行動できるこ
全校合唱に次いで本校が誇れるものの一つになっています。またフォークダン
スとして、全校で参加できるイベントとして、校庭全部を使って行う「YES
ズ」や、昨年はビッグアートにも挑戦し、今年は城北公園を使ってのオリエン
を実現しました。

合唱コンクール

は嵐のような1年間でしたが、その中でも、その年の秋に行われた合唱コンク
ペルは低いとはいえ、比較的、生徒たちが積極的に取り組んだ行事でした。前
任者ががんばってくれて、3年に1度の何もない年を利用して、秋に行った合
唱が好評を得、次年度も続けて行うということになっていたようでした。ただ
が、音楽科という形で行われていたようで、やはり生徒の共感を得、感動をも
には、生徒会中心で行った方がよりよい、という以前の経験から、また、あの
る会」における3年生の無責任な参加をなくすという意味からも、三月に「3
会」として、合唱コンクールをもつようになりました。

ほぼ予想通りの成果を上げ、翌年から、三月には「3年生を送る会」として、
ールは定着し、年を追って内容は充実、レベルもアップし、今や、本校におけ
きで、かつ感動を呼ぶ行事として定着しました。

に合唱コンクールをおこなう意義は、1、2年生にとっては、3年生に対し、
を込めて歌うと同時に、自分たちのクラスとしての1年間の団結を確かめあ
会であり、クラスとしての1年間の取り組みの結果が試される厳しい場面でも
3年生にとっては、勿論、クラスとしての最後の行事ではあるけれど、同時に
歌とはこうして歌うものだよ、ということを教え、残していく、3年生が最も
く、大きく輝いていく場面を作り出すという点で、何物にもかえ難いものがあ
実、毎年の各クラスの合唱は勿論のこと、第2部で行われるセレモニーにおけ
り学年合唱ほど、心を打たれるものはありません。下級生はもちろん、教師にも
師で来てくださる専門の先生がたにも涙を流させるような感動に満れた歌を歌う
きる生徒たちは、本当に桜川中学校の誇りです。

を振り返って

てみると、今までの流れの中で一番大切なのは、やはり生徒自らが、感動

生徒一人ひとりが、自分も参加しているんだ、という気持ちを持たせることにより、学校としての連帯感が生まれます。勝手なことをしている生徒が多いと、そのような感動や連帯感が共有できないことが、無意識の中に、生徒たちの間に浸透し、お互いに「まずはいことはまずいんじゃないかな」という暗黙の規制が働いているように思います。危ない橋もずいぶんありました。運が良かったことあるかも知れませんが、その危ない橋がくずれなかったのも、ほとんどの生徒の中に、その良識が働いていたからだと思います。そして、教師側も、ある仲間が言った「時計の針を逆どりさせない」を暗黙の合言葉として、生徒会行事に理解と関心をもち、意見を出し合い、生徒と共に創り上げてきたことが、今日につながっていると思います。本校では、この他、遠足、移動教室など学校側の行事でも、教員と生徒の一体感があらゆる所で見られます。指導しつつ共に行動できる、という教師側の気持ちも大切です。また合唱は、生徒も教師も共に参加でき、しかも連帯感を生み出す、という意味での力も持ち、学校行事には欠かすことができないと思います。

教師一人ひとりの生徒たちに対する色々な場合での指導も、大変キメが細かく、一人ひとりによく目が行き届いているように思います。何よりも、教師集団の気持ちが一致していることも、大きいと思います。生徒たちの主体性を育てつつ、細かい所でのフォローをしている多くの教師仲間を見ると、自分もがんばらなきゃーなー、と、いつも思われます。生徒に色々なのがいるように、教師にも様々な個性があります。お互いの足りない所を補い合えている、うまくお互いの歯車が噛み合っている、という状態が、今の桜川中学校ではないかな、と思います。区内の他校の状態を見ていると、また危ない時期が来始めたかな？ という心配がうかがえます。今のところ本校は信じられない位平和で無風状態です。が、いつ何時、また嵐に見舞われるかもしれません。しかし、二度と、10年前の困難をくり返さないよう、常に危機感を持ちながら、現在の取り組み方を発展させていけば、なんとか乗り切れるのではないかと思っています。

まとまりのないレポートでしたが、すこしても何かのヒントや役に立てば幸いです。